看板・標識機製造業

芸術作品としての屋外広告・看板を制作する会社
～機械では出来ない工程で付加価値を創出～

7-33　美広社

芸術性を帯びた付加価値が高い看板を世に輩出

美広社は、兵庫県加古川市に本社を構える屋外広告・看板制作を手がける企業である。

現在の代表取締役である中右氏の先代は、映画の看板制作を個人として請負っていた。その事業を引き継ぎ、息子の中右氏が独立して昭和 38 年に起業した。中右氏は、「修業時代、看板制作は手書きであったが、起業した頃から機械化されており、手書きで作成する工程はほとんどなくなってきていますね。」と言う。機械化が進み、職人の手作業によって作成される看板は姿を消しつつある。しかし、中右氏は、「昔は看板を見ると誰が書いたのかが分かったものでした。しかし今は機械で作られ看板はそれが分かりません。手書きだからこそオリジナリティが出せるはずなのですが、味のある字、細部にこだわった字は手書きでないとできないのです。」と言う。機械化によるオートメーション工程で作成されたものは、芸術作品とは呼べないという思いがある。中右氏の経営方針は、「看板は、芸術作品である。芸術性を帯びた付加価値が高い看板を世に送り出し続けたい。」である。機械化による自動化、低価格化の流れに組することなく、顧客に対してその価値を伝え続ける熱い企業である。

中右社長

手書きというレガシー技能を技能検定で確認

「技能士がいると、企業経営者として安心感があります。例えば受注の際に多様な顧客ニーズに対応できます。機械ではできない布や配管にペイントを施すような依頼は職人でなければ対応できないですからね。」と中右氏は語る。

中右氏が起業した頃は、10～15 年は修行を積んでから独立していたが、今は 2、3 年で機械の使用ノウハウを得れば事業を起こせるようになってきている。しかし一方で、短期間で習熟できるようになった結果、業界全体が低価格競争に巻き込まれつつある。中右氏は、「現在では、屋外広告・看板製作では機械化が進んでいますが、技能検定では手書きの質が問われます。あまり使われない手書きの質を試すからこそ価値があると思うのです。」と語る。その理由を尋ねると、「技能士は、機械というツールを否定するのではなく、逆に使いこなした上で、機械ではできない手書きならではの工程の質を高めることに集中する必要があります。手書きでしかできない工程とは、デザイン工程のことです。顧客の言葉にならない漠然としたデザインニーズに対して、顧客が『そう、このデザインなんです欲しかったのは』と唸るような回答を出せることが求められているのです。」と熱く語る。顧客の声にならないニーズを拾い上げ、臨機応変に形にしていくことが求められているため、手書きの技術が重要なのである。デザインパターンが予め決められている機械では到底到達できない領域なのだろう。中右氏は、「技能検定とは、そのような顧客ニーズに合わせて柔軟な回答を引き出すための原理原則を学ぶための有効な手段として位置付けています。」と言う。

顧客からの信頼性向上による受注増に貢献

技能士がいることによって、同社では顧客からの信頼性が増し、新規受注にも好影響が生じている。また、1 級技能士だけで競われる技能グランプリ（『09 年技能グランプリ（ペイント仕上げ広告美術部門』））において金賞を受賞しており、金賞受賞者のいる企業という点も顧客への訴求力を高めている。

「真似る・盗む」を奨励し、技能を向上

中右氏は「技能は、先輩社員から盗むことが基本です。特にカン・コツの世界は見て真似て盗むしかないですね。」と言う。同社は、このような見よう見まね、盗む世界における技能者育成に、技能検定を活用している。「若手社員は、技能士となることで、原理原則が分かり、真似る、盗むための土台ができます。土台がなければうまく真似たり盗んだりはできません。また、先輩社員は、技能検定をパスすることで、自分自身の技能を改めて説明できるようになります。このため、後輩社員への指導が効果的です。」と中右氏は語ってくれた。

美広社

- 業種：看板・標識機製造業
- 住所：加古川市加古川町
- 代表者：中右政勝
- 設立：昭和38年
- 従業員：6名
- 技能士：3名

技能士へのインタビュー

内海　敏春氏（53 歳）　1 級広告美術仕上げ技能士
松本　隆司氏（36 歳）　1 級広告美術仕上げ技能士

美広社にいる 3 人の技能士を取材

美広社には、一級広告美術仕上げ技能士が 3 人いる。中右社長、内海氏、松本氏の 3 人である。

今回は、全国技能グランプリ（ペイント仕上げ広告美術部門）に 3 度出場し、第 25 回技能グランプリ(平成 21 年）では厚生労働大臣賞を受賞した内海氏、とその後輩である松本氏にお話を伺った。

内海氏は、異業種から 33 年前に美広社に入社し今に至る。松本氏は 18 年前に新卒で入社した。

内海技能士

純粋に何かを描くことが好きでこの世界に

技能の魅力について、内海氏は「看板制作は、顧客のニーズに合わせて店舗の外観そのもののデザインから、それに合う屋外広告・看板のデザインをしていくため、トータルに店舗をデザインできるという魅力があるんです。」と語る。技能を生かして店舗の外観そのものをコーディネートできるというところに重きを置いている。松本氏は、「屋外広告であるため、自分の作品が街で目に入ることが魅力です。」（松本技能士）と語る。完成品を街の至るところで目にすることができるという点をこの仕事の魅力と感じている。

入社の動機は何だったのだろうか。「文字を書くこと。レタリングが好きだった。」（内海技能士）、「学生の頃から漫画をよく描いており、当時の担任が美広社を紹介してくれたから。」（松本技能士）とお二人は語る。純粋に何かを描くことが好きという動機で入社している。描くことが好きという動機を満たす場として、屋外広告・看板製作を選択したお二人からは、異口同音に「描くことが好きな人は、デザイン業界や出版業界などを連想しがちですが、屋外広告・看板業界は立派なデザイン重視の業界なんです。」というこの業界に寄せる思いが伝わってくる。

一方で、仕事の難しさについて、内海氏は「自分の持つイメージと、顧客の持つイメージがどうしても刷り合わないときに、どう顧客と対話しながら完成品を作り上げていくかにあります。」と語る。芸術品を製作しているという思いがあるからこそ、妥協せずに、顧客とともによりよいものを作り上げようという熱意を持ち続けられるのだろう。

技能検定は自身や会社の技能レベルの証明

内海氏にとって、技能士となってよかった点は、「顧客企業にとって、自分自身や会社の技能レベルが高いという証明になります。」という顧客に対する PR の面での効果と、「自分自身の中での自信やプライドにつながります。また、毎日の仕事をこなしていると、同じことの繰り返しと言う面も多く、緊張感も薄れてくるときがありました。そのときに検定合格を目指すことで、更なる努力をするためのよいきっかけとなりました。」という自分自身に対する効果を語ってくれた。

松本氏にとっては、「自分が今まで積み重ねてきたことが確認できるよい機会になります。また、それでこそ次のステップに進もうという気持ちになれます。」という効果を語る。今の自分の技能のレベルがどの程度なのかが確認できる、そして次の目標を立てることができる。技能検定は、自分の技能を映す鏡のような存在となっている。

松本技能士

今後は、新たな技能検定にも挑戦を

それぞれの今後の展望について聞いてみた。先輩社員として内海氏は、「会社の後輩指導を今後も重視していきたい。指導で重要なのは、結果としての完成品を見せてあげることや、後輩社員の完成品に対して助言をすることだけでなく、完成品につながる工程で用いるカン・コツ・ツボを一つ一つ理解してもらうこと。」と言う。松本氏は、「広告面ペイント仕上げ作業は 1 級を持っているが、広告面粘着シート仕上げ作業は検定を受けていないので挑戦したい。」と言う。新たな技能検定に挑戦し、仕事の幅を広げていきたいと考えている。